

# 金平鉾山の賑わい



矢田四如軒「加州鉾山図巻」(石川県立歴史博物館所蔵) 坑道から鉾石を搬出している図で、改所では、それを帳付けしている。「宝利子頭」・「宝利子」・「切破寸方役」・「松明切」などの役が見える。坑道入り口には石垣が組んである。

金平鉾山は、能美郡沢村の十村石黒源次が明和年間に発見した金山で、近世の多くの鉾山が初期に発見され、採掘されたのに対し、金平鉾山は近世後期に発見された稀な鉾山であった。

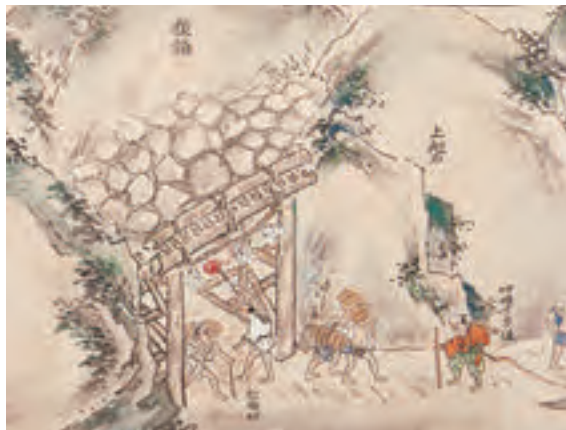
源次は、安永元年(一七七二)十一月、金山御縮方主附を命じられ、操業に励んだ。稼行成績は、灰吹金で、安永二年〜同八年の七年間で一五貫三二〇目、小判金にして三五五〇両、年平均五〇〇両を上納した。天明元年(一七八二)には稼行成績が大幅に向上し、一年間で金七貫目余、小判金にして一五五〇両を上納した。

鉾山の操業に要する資金は、源次が藩から貸し付けを受け、生産した金で返済したと見られる。また掘り子や大工の給銀、源次の取り分なども賄うこ



とから見れば、実際の採掘量はさらに多くなる。この上に、精錬の過程で出る鉛も商人に売っており、かなりの賑わいを見せていたものと見られる。天明元年七月には、伊予国宇摩郡植村の掘り子市右衛門という者が掘り子大工として雇用されるよう申し出るという例もあり、勇名を馳せていたのである。

こうした盛況に、鉾山町も潤い、図のように、多くの商店がたち並び、芝居小屋や傾城町もできた。こうした稼行成績の良さから、天明八年には藩の御手山になったが、産金が徐々に減少し、寛政八年（一七九六）には石黒家の自稼山になり、御手山・自稼山を繰り返しながら、明治十六年（一八八三）には鉾脈を掘り尽くして、廃坑となった。



如軒の没年が寛政六年（一七九四）五月であることから見て、金平鉾山がまだ盛況な時期に描かれたものとみていいだろう。  
（見瀬和雄）

矢田四如軒「加州鉾山図巻」(石川県立歴史博物館蔵) 坑道の柵の外側には、鉾山の役所があり、さらにその外側に、吹座(精錬所)があった。近くでは、「石かね売買」とあり、山師の配下の者が鉾石を商人に売っている場面が描かれている。そばに十分一役取扱者が控えている。



矢田四如軒「金平鉾山絵巻」(石黒有生氏所蔵) 鉾山の柵の外には、鉾山町が賑わった。右手の鍬を担いで歩く人は堀子で、その堀子らを相手として、様々な商売屋が軒を連ねる。たばこ・呉服物・香具・豆腐・八百屋・両替屋・人形浄瑠璃、手前には小間物・茶屋・炭屋・油屋・味噌屋・菓子屋・荒物屋と並び、傾城町もあった。町は、製材する人、商売屋から手数料を取る人など、活況を呈していた。